

6月下旬 ジャガイモの収穫～小さな発見が生まれる～ 下線部は小さな発見を豊かな経験につなぐ教師の援助

～豊かな経験へ～経験の深まり

たくさん収穫できて嬉しいね

4歳児の2月に植えたジャガイモを収穫した。幼児は、ベンチの上にジャガイモを並べながら、「100個超えちゃうんじゃない?」「みんなで食べられそう!」と期待を高めていた。教師が「本当だね。数えてみようか。」と提案すると、幼児はベンチに並べたジャガイモを数え始めた。教師は「どうやると数えられるかな。」と言葉を掛け、幼児が試行錯誤できるよう見守った。

幼児は遊びの中での経験を思い出し、紙テープで長さを測り始めた。友達と紙テープの両端を持って測るが、測れたのはベンチの長さだった。さらに大きいものと小さいもので分けてみたり、数えたものは別の場所に移したりするなど、自分で考えて試行錯誤しながら数えた。結果的には正確に数えることはできなかったが、教師はその姿を見守っていた。

A児は、ある程度数えたらまとめて置き、あとで合計することを提案した。教師は「計算って難しそう…。」と伝え、しばらく様子を見守った。そして「Aくん、何か数えやすい入れ物持っていなかった?」と問いかけると、A児は「あっ!卵パック!」と閃いた。収穫前の好きな遊びの時間に、教師は「ここに入れていくと10個ずつになるんだよ。」と伝え、A児に卵パックを渡していた。そのことを思い出したA児は友達に伝え、それを聞いた他児も後から来た幼児に次々と伝えていった。

ジャガイモが入った卵パックが全部で33個集まり、小さすぎるものも含めて全部で330個のジャガイモを収穫できた。幼児は「何にして食べよう。」「カレーとか。」「コロッケもいいんじゃない?」と、収穫の喜びを友達と伝え合っていた。

【小さな発見】

・たくさん収穫できた喜びから、いくつあるのか想像した。



【豊かな経験】

・A児が閃いた卵パックで数えるという方法が他の幼児の心にも響き、方法が共有された。

【豊かな経験】

・収穫の喜びは友達との共通の体験となり、幼児に強い感動をもたらした。さらに、みんなで食べたいという願いをもち、それが数を数えることへの動機付けとなり、様々な方法を試すことにつながった。

10月中旬 ブドウの収穫とお礼肥 ～豊かな経験へ～経験の深まり

来年を楽しみにしよう

楽しみにしていたブドウを収穫した。たくさんあったが、よく見ると鳥や虫に食べられていたり、干からびていたりするものも多かった。ブドウの木の下には風や鳥に落とされた実がいくつも落ちていた。再度食べられそうな実を数えると、3、4歳児全員が食べる分はなかった。そこで、5歳児が食べる分しかないものの、3、4歳児に見せに行くことにした。5歳児は「年長組になったら食べるのを楽しみにしていてね。これからもお世話頑張って!」と伝え、弁当の際に一人一粒ずつブドウを食べた。

教師は、来年度はブドウがもっと実るように、ブドウの木の根元にお礼肥を施すことを提案した。幼児も賛成し、教師に教わりながら裏庭の土工場でできた腐葉土を根元に掛け、「大きくなあれ!」と願いを込めた。



【小さな発見】

・収穫を楽しみにしていたブドウだが、自然との関わりでは思うようにならないこともあるということを知った。

【豊かな経験】

・5歳児しか食べられなかったからこそ、下の学年の幼児が来年度を楽しみにできるような言葉を掛けることにつながった。

10月中旬 ザクロの収穫 ～豊かな経験へ～経験の深まり

何個あるんだろう

A児が、ザクロの実が割れていることに気付いた。収穫し、実の中を覗くと赤い果肉のついた種がキラキラしていることに気付いた。一緒にザクロを見ていたB児は「赤いのを別に分けよう」と言い出した。机に置いておくと転がるため、砂場遊具の茶碗の中にたくさん集めると「イクラダー!」と大喜びした。教師が「何個くらいあるんだろう?実が大きいから中はいっぱい入っていいそうだね。」と声を掛けると、幼児は「数えよう!」と張り切りだした。「でもこんなにたくさん数えるの大変だね。」と教師が呟くと、幼児はしばらく考えた末、「ジャガイモのときみたいに10個ずつ置いて行こう」と言い出した。教師が卵パックの代わりに紙を用意すると、幼児は紙の上に種を置き、さらに紙にも番号を書いていた。全部数え終わると535個だった。普段はあまり馴染みのない大きな数字に興奮していた。



【小さな発見】

・ザクロの実が割れていて、その中に赤くキラキラした果肉と種があることに気付いた
・初めて見るザクロの実の形状を面白いと感じ、実を取り出して数えようとした。

【豊かな経験】

・ジャガイモを収穫したときの経験を思い出し、その経験を再現して、数えた。

1 1月中旬 カキの収穫 ～豊かな経験へ～経験の深まり

カキもたくさん収穫できた！

7月頃から大きくなり始めた裏庭のカキの実が、10月になると色付き始めた。大きく実り始めたときから、教師は幼児を連れて裏庭に行くようにしていた。

11月中旬、収穫するために、幼児はカゴを持ち、教師と用務主事と共に裏庭に向かった。幼児は切ったカキを受け取り、「重い！」「ツルツルしているね。」と喜んでカゴに入れていった。教師は満杯になったカゴを園庭に運ぶよう促した。幼児は、教師が園庭に敷いたゴザの上にカキを置くと、「こんなに採れた！」と喜んでいて、3、4歳児が5歳児の様子に気が付いて見に来ると、「触ってみる？」「匂いも嗅いでみて。」と話していた。



【小さな発見】

- ・日頃から裏庭に何度も行っていたことで、カキの変化に気付いた。
- ・カキの収穫の体験を通して、カキの実の重いことや、触るとツルツルしていることに気が付いた。

収穫後 ～豊かな経験へ～経験の深まり

みんなで食べられるかな？数えてみよう

たくさんのカキを見て、教師が「ブドウは年長組しか食べられなかったけど、カキはどうだろう。」とつぶやいた。それを聞いた幼児も「何個あるかな？」「みんなで食べられるかな？」と話合い始めた。50個程集まったときにC児が「数えてみようよ。」と提案したが、数が多く数えている間に友達が動かしたり新たに追加されたりして数えられなかった。教師がよい方法がないか投げ掛けると、B児が「数えたカキには葉っぱを置いて印を付けたら？」と提案した。それを聞いた他の幼児も賛成し早速やってみたが、風で葉が飛んでいってしまった。「ジャガイモを数えたときはどうしたんだっけ？」と教師が投げ掛けると、C児が「10個ずつ数えた！ザクロのときは紙に数字も描いたよ。」と言った。そこで教師が「ペンならあるよ。紙は取りに行こうかな。」と言うと、C児は「葉っぱを紙(の代わり)にしよう。」と言って並べだした。

10個の塊ができたら数字を描いた葉を載せていった。後から持ってきた幼児にも10個の塊で置いていることが一目で分かり、一緒に並べて置いていた。並べ終わると最終的に245個だった。C児は「これで幼稚園のみんなで食べられる！」と喜んでいて。

【豊かな経験】

- ・カキを収穫する体験は感動体験となった。自分たちが諸感覚で味わい、感じたり気付いたりしたことを、他学年の幼児と共有したいと考え、伝えた。



【小さな発見】

- ・ブドウを全学年で食べられなかった経験から、カキは全学年で食べられる程たくさん収穫できた喜びを感じた。

【豊かな経験】

- ・今までに園内で収穫を喜んだ経験と、予想以上にたくさん収穫できた喜びが動機付けとなり、皆で食べたいという思いや、そのために数えてみたいという考えが出た。
- ・教師の言葉から、過去に収穫物を数えた経験を思い出し、その時の方法を活用して数を数えた。

2日後 ～豊かな経験へ～経験の広がり

心に残ったもので園庭の地図を作ろう

カキを収穫した翌日、園近くの公園に徒歩遠足に行き様々な木を見たり落ち葉を拾ったりした。その翌日、D児とA児は公園で見つけた落ち葉が園庭にもあるか探して歩いていた。木を見上げながら、「クチナシだ！すてき。」「エノキは高くてよく見えないけど…今もヒラヒラ落ちているから葉っぱはこれかなあ。」など、いろいろ自分なりに考えていた。午後、A児とD児が「園庭の地図を作るの。」と教師に言ってきたため、教師は大きな紙を渡し、地図を作る様子を傍で見守っていた。

翌日も二人は地図の続きを作っていた。地図の中央が空いていたため、教師は「真ん中のところはどこうする？」と投げ掛けた。D児は「真ん中にはこれだよ。」とカキを収穫したときの絵を描き始め、A児も「それね！」と喜び、カキの絵を細かく描いていた。



【豊かな経験】

- ・収穫して数えたことや徒歩遠足で様々な自然に触れたことが感動体験となり、心を動かした。今までの経験を生かし、地図を作るという自分たちで考えた遊びを始めた。

【幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助】

- 収穫の時だけでなくその前後にも収穫物と関わられるようにすることで、幼児の関心が高まり、その後の豊かな経験につながる。
 - ・収穫のときだけでなく、収穫前から様子を見に行き、収穫後もすぐに食べるのではなく幼児が必要感をもって数えたり遊びに取り入れたりできるようにした。それにより幼児の収穫物に対する思いも高まり、より心に残る経験となった。
- 教師が経験のつながりを意識し、幼児が思い出せるように援助することで、幼児自身が、経験したことを活用するようになる。
 - ・これまでの経験を思い出せるような言葉掛けをしたことで、たくさん収穫物を数えた方法を幼児自身が思い出して活用することができた。また、自然との関わりが幼児の心に深く残る経験として積み重なったことで、経験が広がり、自ら園庭の地図を作るという姿につながった。
- 思い通りにならない経験をそのまま終わらせずに、次につながるような援助をすることで、幼児が諦めずに期待感をもつことにつながる。
 - ・ブドウの収穫は思うようにはならなかった。そこで終わらせず、次年度の収穫を楽しみにできるようにお礼肥を施した。自然との関わりではすぐに結果がでないこともあるが、教師が手立てを考えようとする姿を見せたり、幼児と一緒に取り組んだりすることで、幼児も諦めずに前向きな気持ちで取り組むことにつながる。
- 教師が目的を与えるのではなく、幼児が必要感をもったことに取り組めるように支えることで、最後まで諦めずに取り組めるようになる。
 - ・大きな数字を数えたり計算ができたりすることのみをねらうのではなく、幼児が必要感をもって数えたり、自分なりの方法を試したりする過程を保障することが大切である。教師主導にならないよう見守りつつ、幼児が新たな考えを思い付くような言葉掛けをして、最後までやり遂げられるように支える。